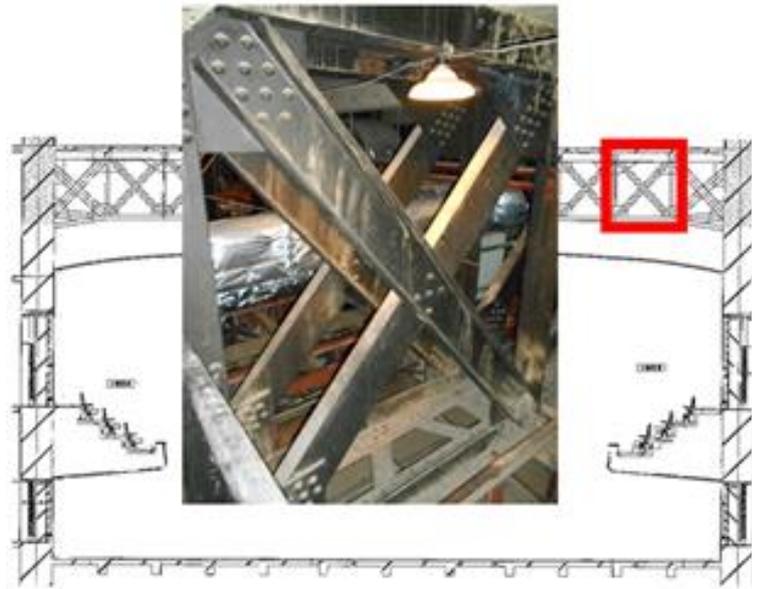


#### 4. 建築としての名古屋市公会堂

開館時の建築上の特徴をご紹介します。まず建物を支える鉄骨。大ホールの真上に4階ホールが載る構造から、大ホール天井裏には巨大な梁が組まれています。現在のボルト締めと違い、現場で熱したリベットを打つ工法で、当時の技術の高さが窺われます。



大ホール天井裏の鉄骨トラス

続いて外壁です。2階以上はスクラッチタイル(櫛で引っ掻いたような表面の細かい溝が特徴)貼です。フランク・ロイド・ライトが設計し現在明治村に玄関部分に移設されている旧帝国ホテルで「すだれ煉瓦」の呼び名で使われてから昭和初期に広く普及しました。

公会堂のスクラッチタイル



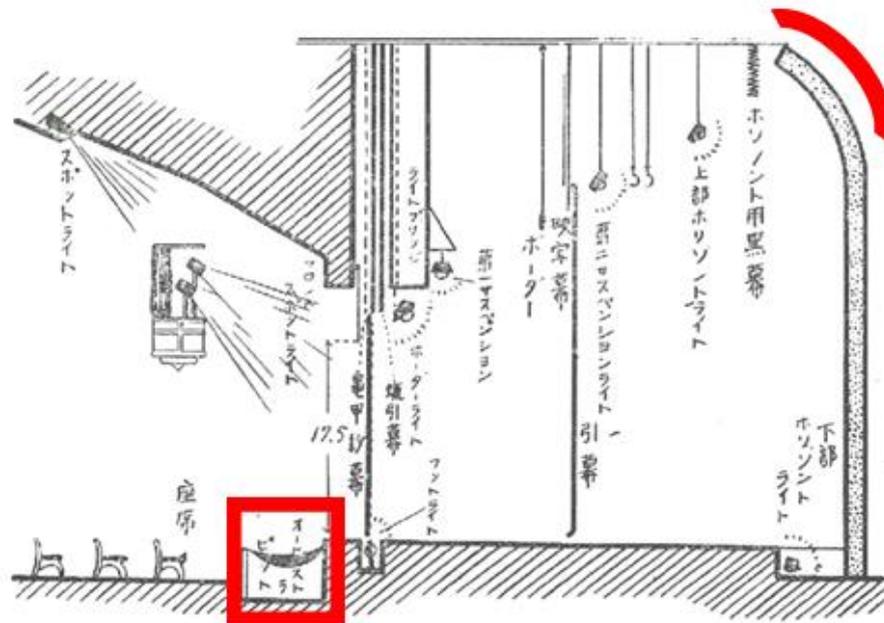
次は基礎です。もともと鶴舞公園は今の新堀川の浚渫土砂で埋め立てた田園地帯で、地盤強化が必要でした。そこで直径 24 cmの松の丸太を縦横約 90 cm間隔で地中に埋め込みました。その数何と 3,486 本！もちろん、現在でもそのまま地中に埋まっています。

ちなみに関東大震災のすぐ後に着工した日比谷公会堂や、中之島の中州に建てられた大阪市中央公会堂も、地盤強化のために全く同じように松を杭打ちしており、近年の免振工事の際に掘り出した松を展示しています。

もうひとつ、大ホール舞台の特徴もご紹介します。舞台背面は左右と上部が手前に湾曲したクッペルホリゾントと呼ばれる壁になっています。音響反射板の効果と、照明で背景に色を着けた時の美しさが当時から好評でした。

さらに舞台手前の客席最前部は一段掘り下げてありました。そうです、これは当時他のどのホールにも見られなかったオーケストラピット！このため戦前から藤原歌劇団を始め、数多くのオペラが上演されました。様々なジャンルに対応する先進的ホールだったと言えます。

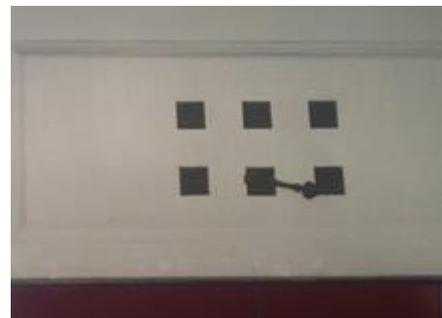
舞 台 断 面 図



また、大ホールロビーには開演を告げる鐘が残っています。録音ではなく、各階にある鐘が同時に叩かれ、のどかな音色が流れます。



同じ大ホールロビーの保存エレベータの扉の上には、昔ながらの時計の針方式の階数表示があります。改修工事ではこのエレベータも最新式に更新したため、この表示板は地下に新設する展示コーナーに移設されています。



時計の針方式の階数表示

開館当時としては最新だったのが、空調設備です。さすがに冷房はありませんでしたが、暖房と空気清浄機能が備わり、当時の新聞には「これならホールへ3千人入っても5千人入っても息苦しい思いをさせない」などと紹介されています。



開館当時の建築上の特徴で最後にご紹介したいのが、質の良い国内産の石材です。玄関階段の縞模様の大石(高知県産)、1階ロビーの壁や柱の日華石(につかせき=石川県小松市産)など、限られた産地でしか採れない貴重な石材が使われています。



玄関階段の大石



1階ロビーの柱の日華石